



渡邊剛教授

東京医科大学病院 心臓外科

渡邊 剛 教授

東京都新宿区西新宿6-7-1

TEL: 03-3342-6111

最寄りの駅/東京メトロ丸ノ内線西新宿駅、徒歩1分

<http://www.heartstokyo.jp/>

<スタッフ>牛島輝明講師・菊池祐二郎助教、高田宗尚助教

Profile

わたなべ・ごう。1958年東京都生まれ。金沢大学医学部卒。同附属病院第一外科を経て、ドイツ・ハノーバー医科大学胸部心臓血管外科に臨床留学。帰国後、金沢大学第一外科教授に就任。2005年から東京医科大学教授。低侵襲冠動脈バイパス術を中心に世界的な実績を誇る。

症例・実績

冠動脈バイパス術80例、弁膜症手術25例、冠動脈バイパス術+弁膜症手術は4例、その他手術10例。(科・2006年)。4000例超(渡邊教授・累積術数)。

特色

世界で最も安全な心臓外科手術を3泊4日で実現する1人

超低侵襲での心臓外科手術を高レベルで実践する世界的な外科医。オフポンプ冠動脈バイパス手術の経験は国内で最も豊富で1500例超、手術成功率は99.6%という高率。日本の平均が98%、アメリカは97%で、手術死亡率0.4%は世界的にみて最も低いと言っていい。虚血性心疾患、弁膜症、心不全外科を専門に心臓外科を広域にカバーし、低侵襲をコンセプトにした最先端治療に常に取り組む。

治療

患者の低侵襲を大命題に、独自の最新術式を実施

ドイツ・ハノーバー医科大学での臨床留学時に多くの手術を執刀。冠動脈バイパス手術の低侵襲下に挑戦し、小切開や完全内視鏡冠動脈バイパス手術などを次々と成功。

その業績と手腕により、金沢大学第一外科教授に41歳の若さで就任した。現在は東京医科大学との兼任で手術を担当。

人工心肺装置を用いない心拍動下冠動脈バイパス術は、患者の術後の回復が早まり、脳梗塞や脳出血といった合併症リスクも軽減されるなどメリットが大きい。1994年以降広く行われるようになり今では一般化しているが、この術式を早くから積極的に推進。同様に、患者にとっての低侵襲をテーマに、他の施設ではほとんど施行されていない多くの術式を実践している。

ハイリスクの患者に向けて覚醒下で心拍動下の冠動脈バイパス手術を行うAwake OPCAB、通常のMID CAB(小切開冠動脈バイパス術)

からさらに患者の負担を軽減させたRib Cage-Lifting法を同院で実践。さらに重症虚血性心筋症の患者に向けた血管新生療法も同教授が金沢大学で行っている例のみである。

そして、Robotic surgeryと呼ばれる内視鏡下手術支援装置を用いた手術、すなわちロボット手術も60例あまりをすでに実施。これは完全内視鏡下にバイパス血管の採取と冠動脈への吻合を行うもので、皮膚には鉗子挿入用の小さな穴を開けるのみ。従来の切開に比べ侵襲が少なく、合併症を減らすことが可能になる。

また僧帽弁手術では小切開手術を開始しており正中切開をしないので、短期の入院で出血もほとんどなく手術を行っている。

患者にとってのオーダーメイド、テーラーメイドの観点を大事に、患者の社会的な側面や重症度、状態やニーズに沿った手術を常に行っている。日帰りでの心臓外科手術の実現を目指している。

渡邊教授のアドバイス

患者さんも、ほかの病院に行くこと、つまりセカンドオピニオンを受けることに躊躇しないでほしい。そして医師に対して遠慮しないでほしい。心臓は1個だけ。外科医にはその心臓を任すのだから、きちんと勉強して、しっかりした判断のなか、医師を選んでほしい。その分、もちろん医師も患者は常に自分の家族だと思って、治療に当たり続けることが大事です。

●外来診療日▶月・水・金曜(8:30~11:00)